

夢湧き夢に夢中

第16号

令和8年1月30日 文責：大谷

最強ではなく、「最高の…」

「柔道をとったら何も残らんような人間になるな」。山下泰裕さんが父親から繰り返し言われた言葉だという。学業をおろそかにしなかったのは父の教えがあったから、と本紙連載「わたしを語る」で振り返っている▼血のにじむような鍛錬のたまものとはいえ、栄光に彩られた柔道人生である。旧矢部町（現山都町）生まれ。若くして無敵を誇り、「昭和の三四郎」と騒がれた。大学進学後、十九歳十カ月の史上最年少で全日本選手権を制した▼モスクワ五輪ボイコットの挫折を乗り越え、1984年ロサンゼルス五輪は無差別級で金メダル。痛めた右脚を引きずりながらの一本勝ち日本中を歓喜にさせ、国民栄誉賞にも浴した▼現役引退後は母校の東海大で教員や柔道部監督を務め、日本オリンピック委員会の会長に就くところが二年前の十月、不運が襲った。家族で休日を通りかかっていた際に転倒して頸髄を損傷したのだ。最初は一日一日を生きていくので精一杯だったが、懸命のリハビリに努め、来月（十一月）から教員として業務に復帰するという▼当面オンラインで指導するが、対面での講義を目指す。山下さんは「できるだけいいコンディションで学生たちと向き合い、忌憚のないやりとりができるよう準備を進めている」とのメッセージを出した▼今も手足の自由は利かず、車椅子を使用している。最強ではなく、「最高の柔道家だった」と言われるのが山下さんの念願だった。試練に屈しない六十八歳での挑戦は学生たちにとって最高の教えになるはずだ。

〔2025年10月2日 熊日朝刊「新生面」より〕

昨年の十月、何気なく手にした新聞に右の記事があった。柔道家、山下泰裕氏といえば、わたしの同郷の英雄であり、

幼い頃のわたしにとっては、唯一「会ったことのある名人」だった。

小学三年生の時に柔道を習っていた友人が山下氏からもらった直筆サインを教室に持ってきた。生まれて初めて見る名人の直筆サインに教室中がわいた。そして、担任の先生がせっかくだからと教室後方に飾り、休み時間の度にみんな眺めた思い出がある。

その当時、教室には電動鉛筆削りが常備されていて、我々は自由にそれで鉛筆を削っていた。そんなある日の授業中、わたしはいつものようにそれで鉛筆を削った。ガリガリという音を立てて削られた鉛筆の芯先は見事なまでに美しく尖った。すると、そばに飾ってある山下氏の直筆サインが目にとまった。「落書きしちゃう」何を思ったか、わたしは尖った鉛筆でしか書けそうもないか、細い字で落書きをしてみたのだ。

浅はかだった。細くて小さい字なら罪悪感もなく「誰が書いたつや」と笑い飛ばされて終わるかと思った。しかし、授業が終わった休み時間に事件は起きた。それは瞬間にクラス中に広がり「サインに落書きするなんて許せん」という空気に一変した。次の時間に誰が書いたのかという話し合いになった。その日の帰りの会でも「犯人は誰や」と話題につきなかつた。わたしはみんなの前で正直に言い出せないままその日を終えた。サインの持ち主である友人と級友らへの申し訳なさや後悔の気持ちで、その日の夜は眠れなかつた。そして散々悩んだ末に出した答えは、明日の朝すぐ担任の先生のところに行って正直に話すしかないだった。

翌朝、担任の先生が教室に来る前に廊下で待ち伏せて自ら白状した。大層怒られることも覚悟の上だった。しかし先生は笑ってこう言った。

「全部分かつたよ。自分から言うてくれてよかった。昨夜は眠れなかつたろ。きつかつたね」それきり先生はこの件を教室で二度と話題にされることはなかった。九歳の愚かな少年が「人の嫌がることは絶対にしてはいけない」と反省し人生の正しい生き方を学んだ瞬間だった。

それから四〇数年来、山下泰裕氏の名前を見聞きする度に、このときのことを痛烈に思い出してきた。そして同時に、わたしは二人の「最高の師」に出会ったということも。来週から二月。出会いに感謝する如月に。

■先日の2年生の修学旅行では生徒の送迎をはじめ学年委員の皆様には駐車場の誘導等にもご協力いただき誠にありがとうございました。おかげさまで非常に有意義な修学旅行になりました。心より感謝申し上げます。

■3年生は先週の私立高校入試に続き、来週早々には公立前期選抜を迎えます。学校としても引き続き全力でサポートしますので、体調管理や当日の送迎など、ご家庭でもどうぞよろしくお願いいたします。